

チャンネルキャットフィッシュの導入試験

後藤悦郎

チャンネルキャットフィッシュは一般的にはアメリカナマズと呼ばれ、北米原産のコイ目ナマズ亜目に属し、分類学的には日本のナマズとは科が異なる。当県での養殖魚としての可能性を探るため、埼玉県水産試験場よりふ化稚魚を導入した。キャットフィッシュは産卵するまでに3年以上かかるため、本年度は稚魚の飼育のみを行ったのでその概要を報告する。

飼 育 概 要

昭和57年6月16日に飛行機便にて稚魚1,700尾を導入した。(運搬中の斃死は8尾)うち1,500尾を30 m^2 屋外実験池へ、200尾をビニールハウス内の1トンパンライトタンク(以下クンクと略す)に収容した。この時の稚魚の平均全長は17.9 mm であった。注水は微注水で、実験池では河川水を使用した。タンクでは河川水が採れなかったので水道水を使用した。餌は両方ともあらかじめ培養してあったミジンコを投与した。

6月19日に一夜にしてタンク内の200尾が全滅した。原因は水道水の注水量が多かったため中に含まれるカルキが影響したのではないと思われる。

6月22日より配合餌料(日本農産製アユ1号)による餌付けを開始したところ、7月5日には餌に反応し始め、7月9日には落下中のものをよく摂餌するようになった。

このころには底にミドロ類が異常に繁茂し、キャットフィッシュの棘がひっかかり毎日少量ずつ斃死するものが出たのでサイホンホースにより2~3日毎に底掃除を行った。

7月20日頃より白点病が発生し、魚体が黒ずんでやせた衰弱魚が多くなり、斃死も出始めたので、治療のため大部分を取り揚げて6 m^2 のふ化池へ収容した。ふ化池は注水量を増加し、7月26日から7月29日にかけて1%60分の塩水浴を数回行い様子を見たが治まらなかった。8月4日から8月8日まで2ppmメチレンブルー浴を5回実施したところ効果があり病気は治まった。この白点病により300~400尾の被害があったが、早期よりメチレンブルー浴を実施していれば軽い被害ですんだと思われる。

8月9日にふ化池より280 m^2 飼育池に移動した。その際計数したところ平均全長46 mm のもの808尾を確認した。

10月18日に実験池のもの(7月26日に取り揚げた残りで200尾程度いると思われる)の全長を測定し平均79 mm の結果を得た。11月4日に飼育池の全長を測定し、平均108 mm の結果を得た。これ以後水温も低下し越冬期となった。

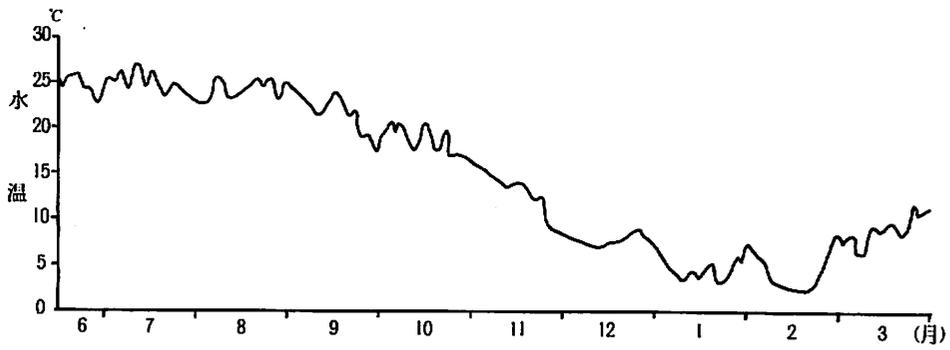


図 - 1 飼育水温の変化

文 献

- 1) 水産庁振興部：特用水産養殖ハンドブック，地球社 1979 pp268～280
- 2) 村井武四：養殖VoL 17 No. 11，緑書房 1980 pp90～94
- 3) 村井武四：養殖VoL 17 No. 12，緑書房 1980 pp89～92